



Column

川が死んでらいね…

須田 文明

その日も、利根川本流での釣果が芳しくなく、支流の、何の変哲もない小河川を釣り上がっていた。近所の農産物直売所の客らしい初老の男性が、橋の上から、私に語りかけてきた。「ヤマメかい？釣れるかい？」。その人は鮎釣り専門であること、鮎も全く釣れなくなったことなどを話した後で、利根川本流の方をあごでしゃくりながら、「川が死んでらいね」とつぶやいたのであった。

確かに私自身、そのあたりの利根川本流は、小学校の低学年頃から知っているのだが、ウグイやオイカワといった雑魚があまり見られなくなったし、釣り仲間の弟も、カジカが全くいなくなったと不思議がっていた。鮎が釣れなくなって以降、漁協が、ヤマメの放流に力を入れ、「利根川本流の大ヤマメ」を釣り雑誌などで大々的に売り出していったことや、河川の汚染、カワウの増加などもこうした雑魚の減少に影響があるのかもしれない。

さて今年も、もうすぐ溪流釣りの解禁で、釣り師たちもそわそわし出している頃であろう。思い出すのは、10年ほど前に行った、四万十川源流地域での溪流釣り解禁日のことである。宿の主人が、ポイントなどを教えてもらおうといい、と言って、私を地元の釣り師のところに連れて行ってくれた。公共事業による土木作業などで身を立てておられる、その釣り師の家には、すでに何人かの先客があった。その人の中学時代の恩師の退職教員と、やはり中学時代からの友人の役場職員であった。彼等は、解禁日にはこうやって酒を酌み交わしながら、シーズンの豊漁祈願を行うのを習わしとしているというのである。

また、やはり利根川の支流の奥深くで釣り

をしていたところ、先に行く人がいた。先を越された、と思いがっかりしたのだが、よく見てみるとその人は釣り竿を持っていない。声をかけてみると、「キノコ採り」なのだという。「鉄砲ぶちもするよ。鹿をとるよ。熊もいる」とのことであった。このように山里の人たちの行う溪流釣りと、私たちが「レジャー」として行うそれとの間には、どこに違いがあるのであろうか。私たちは、溪流釣りガイドブックやインターネットなどで、どここの河川が釣れそうだとか、どこで大ヤマメや大イワナが釣れた、という情報によって、河川を選んで行くことになる。都会暮らしのために、せいぜい釣行できる回数は限られているのだから、効率よく釣れる場所を選択しているのかもしれない。ところが、山里の人たちは、溪流の近くに住んでおり、少しばかりの雨が降ったりすれば、すぐに竿を持ち出してお目当ての場所に直行することもあるだろう。実際、朝の出勤前に、あるいは勤め帰りに竿を出す、などという贅沢を日常的に行っているのである。

ところで当研究所でも図書課のU氏や評価・食料政策部のT氏をはじめ、何人かの溪師がいるが、それぞれスタイルがあってももしろい。私やU氏などが餌釣りなのに対し、若いT氏はフライ派で、釣った魚は放すのだという。また溪流釣りといってもヤマメ釣りを好むか、より山深い渓谷でのイワナ釣りを好むかでも好きずきがあるようである。私などは何と言ってもヤマメ釣りの方を好むが、昨年おじゃました東北農業研究センターのI氏などはイワナ釣りや、ルアーでのサクラマス釣りを好むといった具合である。

さて、このように溪流釣りへの情熱を持った人は結構身近にもいるので、溪流釣りを通じた山村振興についていいアイディアが出てこないものだろうか。雇用情勢をはじめとした社会経済的なマクロ状況によって、個人的行為がある程度規定されており、こうしたマクロな枠組みが、たとえばUターンやIターンといった行動を大きく方向付けているのも事実であろうが、田舎暮らしや土いじりへの情熱もやはり、個人的行為を突き動かしているのだから、溪流釣りといった動機も、山村振興と関連づけられるべきだと思うのである。